

自治体職員「冬の時代」に

政策研究大学院大学 教授 井上 靖朗

国際文化研修の「夏号」に「冬の時代」というタイトルはいささか不似合いかもしれませんが。とはいえ、採用試験の倍率低下、若手の離職増など人材確保が難しくなる中で業務は高度化・複雑化する一方であり、自治体職員を取り巻く状況の厳しさは多くの読者が実感しているとおりでしょう。

このような中で、各自治体ではDXの推進や生成AIの活用等による業務負担の軽減、テレワーク、フレックスタイム等の柔軟な働き方の導入に加えて、カスタマー・ハラスメント対策や窓口時間の短縮など、これまではややもすると躊躇していたような取組も始まっています。もちろん、これらの取組を進めること自体は重要です。しかし、検討段階で生成AIの力を借りるにしても、これらの取組の方向性を考え、最終的に判断しなければならないのは職員自身です。とすると、地方自治体はこれまで以上に「人を育てる」ことに注力しなければならないでしょう。

そのための第一歩としてお勧めしたいのは、

『自治体の研修担当になったら読む本』（池田一樹／著、学陽書房、2,750円）です。総務省自治体大学の研修を受講するだけでなく、実際に研修の企画立案・運営にも携わる「特別研修生」を経験された著者ならではの、さまざまな研修

ノウハウが盛り込まれています。ただ、本書の特徴は、単なるノウハウ本ではなく、それらが理論に裏打ちされている点です。人材育成・研修は経験則のみに依拠して語られがちですが、経営学の研究テーマの一つとして膨大な蓄積がある分野で、その理論は自治体の人材育成にとっても参考になるものです。本書はそのことを改めて認識させてくれます。

また、人材育成・研修というどうしても職員個人をどう育てるかという点が重視されがちですが、職員自身が学び続ける組織文化をどうつくるかという視点も重要です。その点を指摘しているのが、『リスクリングは経営課題—日本企業の「学びとキャリア」考』（光文社新書）（小林祐児／著、光文社、1,012円）です。最近流行の「リスクリング」をブームに終わらせず、どうやって日本企業を「学びの共同体」にするのかという本書のメッセージは、地方自治体にも、いやむしろ地方自治体にこそ当てはまるのではないかと思います。

冬来たりなば春遠からじ——多くの地方自治体が人材育成に注力し、人が成長する組織となることを願っています。



『自治体の研修担当になったら読む本』
池田一樹／著 学陽書房



『リスクリングは経営課題—日本企業の「学びとキャリア」考』
小林祐児／著 光文社